当院における発生場所別にみた血流感染症の起炎菌に関する比較と考察

◎小林 哲也[1)]、西 千寿[1)]、佐野 亜由美[1)]、藤本 美也子[1)]、大瀧 博文[2)]
社会医療法人 同仁会 耳原総合病院[1)]、関西医療大学[2)]

【背景と目的】血流感染症において，その感染，発症には臨床背景が大きく影響し，市中発症および院内発症では起炎菌の疫学的傾向が異なると推察される。当院の救急外来では，市中発症の血流感染症の治療を積極的に実施しており，今回は市中発症と院内発症の血流感染症の起炎菌を比較し考察することを目的として疫学調査を実施した。

【方法】2019 年～2020 年の 2 年間の血液培養検査の検出菌を市中発症と院内発症に分けて集計し，各年の検出菌の内訳や薬剤耐性菌の占める割合を比較し考察した。

【結果】2019 年は 411 件の市中発症，132 件の院内発症を，2020 年は 438 件の市中発症，128 件の院内発症を認めた。市中発症においては *Escherichia coli* が最も多く，全体の約 40 を占めた。次いで *Staphylococcus aureus* の 10%，*Klebsiella pneumoniae* の 8%，G 群溶血性連鎖球菌の 5%と続いた。院内発症においても *E. coli* が最も多かったものの全体の約 20%と市中発症の半分の割合であった。次いで *S. aureus* の 15%，*Enterococcus* spp. の 10%，*K. pneumoniae* の 7%，*Enterobacter cloacae* の 6%と続いた。また *E. coli* における ESBL 産生株の割合は市中発症で約 20%，院内発症で 20～40%，*S. aureus* における MRSA の割合は市中発症で約 40%，院内発症では 30～60%を示した。

【考察】市中発症と院内発症では起炎菌の内訳が大きく異なる結果であり，院内発症の場合は自然耐性の問題が生じやすい *Enterococcus* spp.や *E.cloacae* の割合が増加していた。しかし，MRSA や ESBL 産生 *E. coli* の占める割合においては市中および院内に関わらず高い値を示しており，抗菌薬適正使用を踏まえた院内での情報共有が必要と考えられた。

連絡先：072-241-0501